
小さな物語

雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな物語

【Nコード】

N7389X

【作者名】

雪

【あらすじ】

彼はとてもちいさな少年だった。

少年はトリップした。異世界に。これってファンタジー？と思ったら、自分がファンタジーな存在になっていた。

これは異世界で暮らす 小人少年の物語

はじまり

その日は雨がふっていた。

ザーザーとバケツを引っくり返した酷い雨だった。

男は城に勤める 平の兵士であった。

仕事を終え 帰路につく途中男は道端に何かが落ちているのに気づいた

「人形か？」

男は小さな好奇心からそれに近づいた。

雨にぬれてそこにおちていたものは確かに人の形をしている。

「やっぱり 人形・・・！？」

胸の辺りが上下に動いてる。

それは息をしていた。

人形のように小さいそれは、小さな人であった。

「生きてるのか これは」

おれのこと

俺の名前は 小嶋 ミドリ 五人兄弟 三番目 次男 高校一年
15才

あだ名は 「小鳥ちゃん」

幼稚園のころから高校生になった現在までずっと ずっと ずっと
背が低い

「なんでだ」俺はうめいた。俺は今日 中学のころから大好きだった先輩に告白をした。

そりゃ 返事なんて期待なんてしてなかったけどさ うん

『ごめんね わたし小鳥ちゃんのこと大好きだけど、

そついう意味じゃなくてあくまでもマスコットの感覚だったから』
つてそりゃないよ！俺だつて男の子だもん そんなこと言われたら
涙が出ちゃうクスン。

好きで小さいわけじゃねえよ

昨日でついに末っ子に身長抜かされた。

そりゃねえよ この世には神も仏もないのか！

「さらに 家事 料理 得意ときたら、マスコット支持数ゲットだぜ！」

俺の隣で悪友 宗助は素敵笑顔でそういつてきた

イ・ラ・つ・く v

大鷲 宗助 美形の顔が俺のプライドにひびがいれる

「壊したい顔を そして身長をよこせ！吸収させる！」

「残念 効果は無いようだ！」

くそう！この高身長め たけのこのようにニヨキニヨキ伸びおつて

「どうせなら 異世界に行きたい！ 小人の世界に行きたい！小

人の世界にいつて巨人になりたい！」

「お前・・・可哀想にそこまで追い詰められて」

「よせよ 余計に惨めなるだろ」

「異世界トリップとかウケルだろ プッ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ちくしょうゝ（涙）」

この高身長め！」

この瞬間 空が光った

腐敗の森

目の前が真っ白になって、目が覚めたら俺はなんだかフカフカとしたところに寝かされていた。

「ここはどこだ」

プーンと何がおう

「うっ」

とても覚えがある匂いだ。汗臭い。生乾きの匂い。巨大な布がつるされている。

あれは、なんだ。

よくよく周りを見渡せばゴミだらけだ。

しかも、家具の一つ一つがでかい。

「小人の世界じゃないことは確かだ」

もしかして、夢かも？

そう思ってたねって見たが普通に痛い。

「目をさましたのか」

大きな声がした。

俺はおそろおそろ 上を見上げるとそこにいたのは

巨人だった。

しかも、結構体格もいい。

「君は人間か？」

巨人はいった。野球チームじゃないよ？

「人間にきまつてるじゃないか」

「そうか？とんでもなく小さいぞ」

ガン

「ここはどこだ」

「俺の家だ 君は雨の中たおれていたんだぞ」

「雨の中？」

クンクンと鼻をならすとたしかになんか泥臭い。

「初めは人形だと思ったんだけど 生きてるみたいだから連れてきた」

「そうですか」

「君は何処から来たんだ 森か それとも海からか？」

「日本からです」

「日本？なんだ？それは？」

目の前の巨人は日本を知らない。

ああ やっぱり ここは

” 異世界 ”

小人さん？ エミリオ視点

男が目を覚ますと そこは知ってる天井だった。

おととい 拾った小人は昨日 目をさました。

「ここは異世界なのか」

小人は言った。小人はどうやら異世界からやってきたらしい。

名前は 小鳩 ミドリ 可愛らしいらしい名前の小人だった

男の名前はエミリオ・アーティラス 城の第二師団の平兵士である。
ミドリは自己紹介をすませるとエミリオの部屋を見渡して悲鳴をあげた。

エミリオが何事かと尋ねれば なんてことはない部屋が汚いという。
「なんだ そんなことか」

とエミリオが笑うと ミドリはまるで悪鬼のごとく顔をゆがませた。
ミドリは悲鳴をあげながら、雑巾とモップの場所を聞くとエミリオの部屋の掃除を始めた。

残念ながら、モップはもてなかったが自分の身の丈 以上もある雑巾を使って器用にも部屋をきれいにしてみせた。まるで魔法のようだ。 いやエミリオの知っている魔法とは随分ちがうのだが

「小人や妖精が綺麗好きというのは本当だったのか」
エミリオはつぶやいた。

ミドリはエミリオの部屋をすっきりきれいにしてしまうと風呂に入りたいといった。

だが、ここにはミドリにあう風呂はない。

エミリオはコップにお湯を入れてやるとミドリに捧げた。

「熱湯じゃないだろうな？」

「安心しろぬるま湯だ」

温度を確認するとミドリはためらい無く服を脱ぎコップ風呂に飛び込んだ。

「いいお湯だ」

かなり気持ちよさそうだ。

「和むな」

エミリオも癒された。

次の日

食卓に用意されたのは 見覚えの無い料理だった。

「火はつかえたのか？」

「体が浮くんだ ものも動かせる」

どうやら 小人の力はダテじゃない様子

「美味そうだな 食べてもいいのか？」

おいしそうな黄色の物体に口から唾がこみ上げる

「もちろん おたべ」

俺は早速 その物体を口に入れた

「美味しい！」

「おおげさだな ただのチーズオムレツだよ」

「こんな美味しいものはじめて食べた！」

なかはトロトロとしていてチーズといったか？ すこし薄い黄色の物体が濃い黄色と混ざって舌の上で

濃厚な味わいをだしている。パリパリとしたサラダもまた美味しい。俺はすっかり平らげると満足した。

「ありがとう ミドリ！」

「別に 喜んでもらえてよかった 仕事は何時からなんだ」

「今日はまだ時間がある 良ければ 町を案内してやろう」

ミドリはパーと顔を輝かせた。

「本当！ 嬉しい！」

今日はいい日になりそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7389x/>

小さな物語

2011年10月26日14時02分発行